＼合併号！／

05 2022 06 2022

ニジェール支所便り

支所長よりひとこと

酷暑の中の4月のラマダンも無事に乗り切り、6月も半ばになって少し雨も降りはじめ、確実に季節が移ってきました。現在のニジェール川の様子。これから少しずつ水位が上がっていきます。

遅くなりましたが支所便りをお届けします。

シディガリさんの定年退職

JICAニジェール事務所に勤務して37年近くになるロニ･シディガリさん（60歳）が3月の年度末で定年退職を迎えました。彼がJICAニジェールで勤務を始めたのは1985年6月。青年海外協力隊員派遣が始まって間もない当時はシステムエンジニア、理数科教師、自動車整備、病虫害、土壌肥料、上下水道、空手、獣医師の協力隊員の皆さんが活躍していました。シディガリさんは隊員連絡所のガルディアン兼掃除担当として住み込みで働いていました。

「嬉しかったことは一人から信頼されると次々に信頼されるようになったこと。隊員は自分と兄妹のような存在だった。これまで日本人としか仕事をしたことがなかったがとても幸せだった。少し残念だったのはいつも連絡所にいなくてはならなかったこと。」　第二の人生は?と聞いたら、「特に何も決めていない」と小さく笑いました。

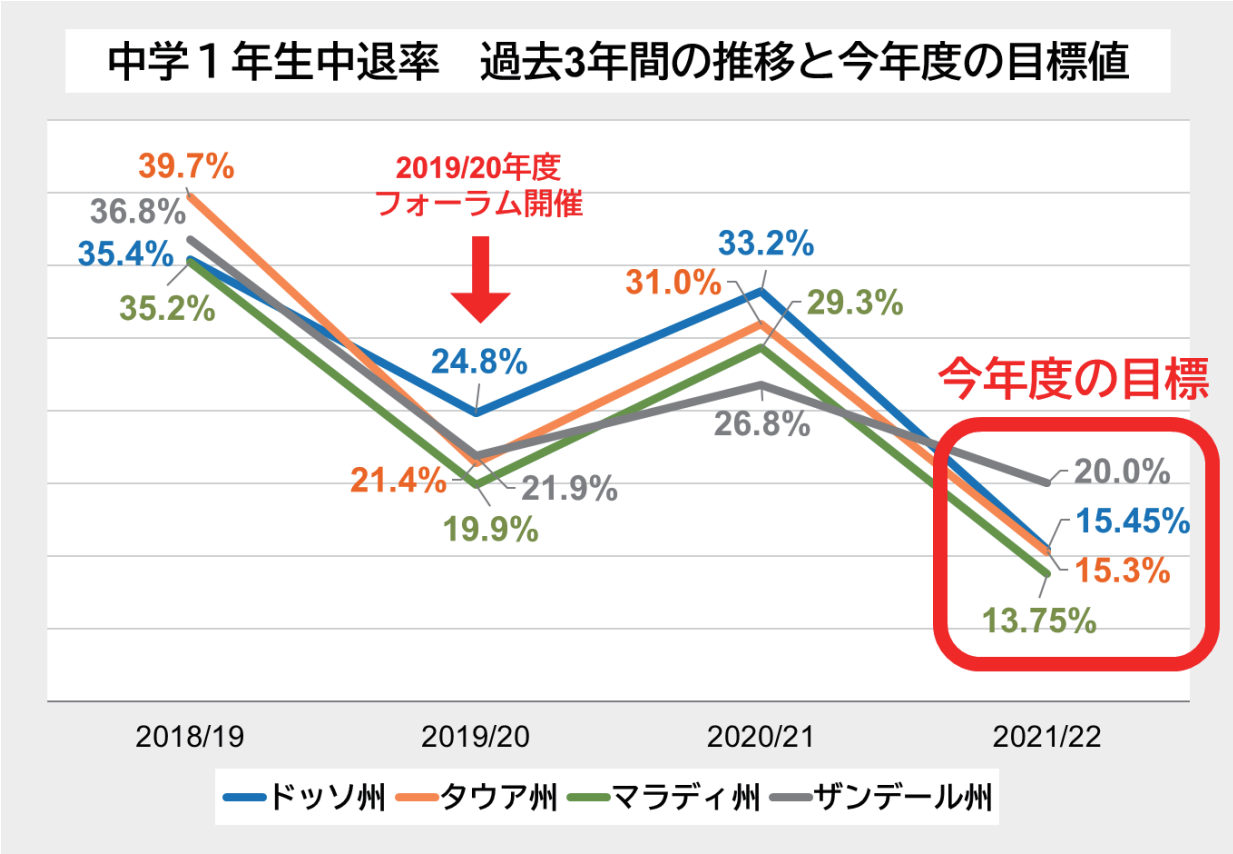
2011年まで派遣されていた700人近い協力隊員たちとの思い出と、6人の大きくなった子供達、3人の孫に囲まれ元気に暮らしていってほしい。

ありがとう。お疲れ様でした。　（ニジェール支所長 小畑）

ニジェール政府はいま、初等教育と前期中等教育におけるジェンダー格差改善のための取り組みを進めています。なかでも、「農村部の初等・中等教育における女子定着率の改善」に着目し、コミュニティ協働の重要性を強調しています。プロジェクトは小学校から中学校への進学時に女子中退率が高まる点に注目し、小学5・6年生と中学1・2年生を主なターゲットとした「4州女子中退防止フォーラム 」を開催し、約14,000校の学校運営委員会に中退防止モニタリング委員会 を設置しました。今月号では、このフォーラムや中退防止モニタリング委員会の活動の進捗状況をお伝えします。

中退率半減を目指して、約14,000校が活動中

「女子中退防止フォーラム」は2021年10月～2022年2月にかけて、ドッソ州、タウア州、マラディ州及びザンデール州の4州で開催され、学校運営委員会連合代表の他、州知事、教育行政官代表、伝統的首長代表、宗教的指導者代表、市長など、州の教育関係者が参加しました。そして、フォーラムのテーマ「小学5・6年生と中学1・2年生、特に女子生徒の中退率改善」に沿って、各州で今年度の中退率改善目標が立てられました。下のグラフは、中学1年生の過去3年間の中退率推移と、各州がフォーラムで決議した今年度の改善目標を表したものです。



フォーラムの仕組みについては、ニジェール支所便り2016年5月号掲載「第5回:誰でもわかるみんなの学校プロジェクトのモデル解説～フォーラムアプローチ～(p.4)」を参照。https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/ku57pq000020tcwd-att/201605.pdf

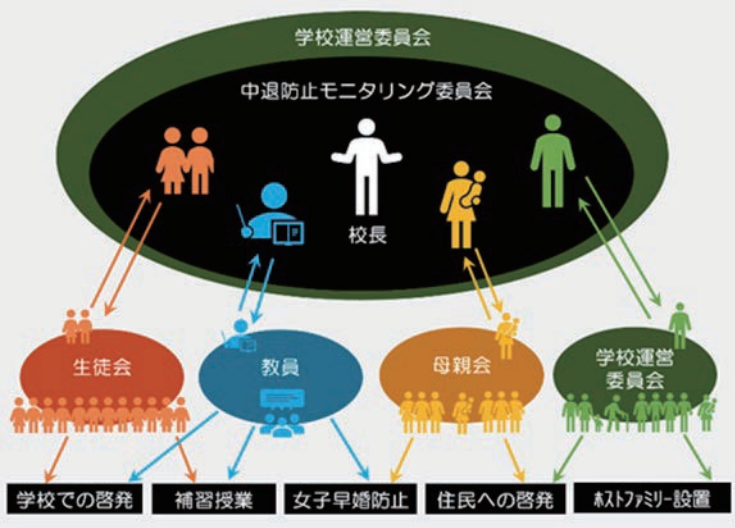
中退防止モニタリング委員会は、「生徒会」「教員」「学校運営委員会」「母親会」という学校を取り巻くアクターグループの代表と校長先生の計6名で構成される学校運例委員会の下部組織です。各アクターグループは、集会で中退要因を分析し、実現可能な解決策を出し合います。この解決策は中退防止モニタリング委員会の会合で各代表により発表され、学校運営委員会メンバーの支援のもと、具体的な活動として学校活動計画に落とし込まれ、他の活動同様に1年を通して実施されます。

現在4州13,942校の小･中学校で、中退防止の取り組みが実施されています。3、4月には各州でモニタリング会合が開催され、中退防止モニタリング委員会の活動状況を中心に中間報告が行われました。その中でも特に興味深かったエピソードを3点ご紹介します。

エピソード1：母の声を届ける中退防止モニタリング委員会

今回のモニタリング会合では、「中退防止モニタリング委員会の設置により母親会が活性化された」という声が多く挙がりました。母親会は学校運営委員会の構成メンバーにも入っていますが、ニジェールの宗教的･文化的背景により、その活動は男性メンバー中心の傾向にあります。学校運営委員会の集まりで、女性は一番後ろに座りあまり発言しない、というのはよくある光景です。しかし、「女子の中退防止」において、母親は重要なキーパーソンです。女子中退防止の有効なアイデアも、きっと持っているはずです。プロジェクトの課題は、そのアイデアを引き出し、学校運営委員会の活動に反映させることでした。

そんな時、優良事例として現場で発見されたのが、今回導入に至った「中退防止モニタリング委員会」でした。その強みは、各アクターが立場に応じて、中退問題解決のアイデアを持ち寄る仕組みです。女子の中退には、低学力、児童労働、女子の早期結婚･出産、保護者の反対や学校までの距離の問題など、多くの要因が複雑に関係しています。この解決には、各アクターがその立場に応じて有効な策を講じ、複数の中退要因に同時に働きかける仕組みが必要なのです。



「中退防止モニタリング委員会」では、母親会、男子生徒、女子生徒、教員、学校運営委員会など、各アクターグループがそれぞれに問題分析を行い、解決策を考えます。そして、各アクターグループ代表は中退防止モニタリング委員会会合にこの解決策を持ち寄り、活動計画に落とし込みます。そうすることで、母親を含めた全アクターグループの意見が活動計画に反映されやすくなりました。

今回のモニタリング会合では、母親会の活動が活動計画に多く反映されたことで、その活動が活発化したことがわかりました。例えば、ドッソ州ドゥティ県やザンデール州ベルベジ県からは、母親会による女子生徒への家庭訪問が活動例として挙げられました。これら農村部では、男性は父親が不在の家庭を訪問してはいけない、という慣習があります。そのため、男性教員や男性の学校運営委員会メンバーに代わり、母親会メンバーが遅刻や欠席の多い「中退予備軍」の生徒宅に訪問し、母親や女子生徒に聞き取りを行ったり、学校へ来るよう呼びかけたりする例が報告されました。

エピソード2：早婚防止のキーパーソンは伝統的首長

早婚防止の取り組みにおいて、伝統的首長の貢献が注目されました。例えば、タウア州イレラ県やバガルア県、マラディ州テッサウア県では、フォーラムに参加した伝統的首長が、傘下の首長たちを集めた会合

で「早婚ゼロ宣言」を行い、各村落の首長たちをその責任者に任命しました。農村部において伝統的首長は大きな影響力をもっており、その首長たちが早婚を取り締まるようになったことで、早婚のケースが自発的に減ったこと、また地域住民が早婚を首長に通報し、首長が説得することで止めさせた例などが報告されました。

エピソード3：ザンデール州タキエタ県、最下位からの挽回戦略

今回のモニタリング会合では、ザンデール州タキエタ県の取り組みも注目を集めました。フォーラムでは、州の中退状況だけでなく学区別中退率ランキングも発表し、競争心を煽ることで更なる改善を目指します。ザンデール州初等フォーラムの場合、タキエタ県ガラグムサ学区は昨年度の小学校6年生中退率が48.6%と、州内最下位でした。これにショックを受けたガラグムサ学区関係者は、教育行政官、伝統的首長、市長及び学校運営委員会連合メンバーからなる委員会を結成し、3月15日～22日に学区内の50校を訪問、中退状況調査を行いました。その結果、3月までに1,520名（男子776名、女子744名）の児童が学校を長期で欠席していることがわかりました。

これら児童を学校に呼び戻すため、各校の中退防止モニタリング委員会は家庭訪問や保護者･児童への面談、住民総会での呼びかけを実施、その成果か、学区関係者が4月末に2回目の訪問を行った際は、長期欠席者1,520名の62%にあたる942名（男子423名、女子519名）が通学を再開したことがわかりました。ガラグムサ学区では、今後もこの取り組みを継続し、州内で最も中退者が少ない学区を目指します。

以上、3、4月に行われたモニタイング会合での興味深い事例を掻い摘んでご紹介しました。プロジェクトではフォーラムの優良事例特定のため、引き続き調査を行っていきます。8月にはフォーラムの結果も明らかとなりますので、乞うご期待ください!　（みんなの学校プロジェクト 専門家一同）

プロジェクト・専門家等の進捗状況紹介

PASVA：農業普及システム改善プロジェクト

PASVA 映像作成

昨年末にC/Pである農業省普及局（DVTT）及び農業実践開発大学校（IPDR）のスタッフを対象に、映像作成研修を実施しました。

元々は、昨春のJCCにおいて環境省職員が作成した啓発用ビデオを、皆で鑑賞したところから始まっており、後にC/Pの意欲に後押しされて、プロジェクトの広報用、教材用の映像資料を作成することを目標として本研修を実施することになりました。

研修は普及局の会議室で座学及び敷地内での実践を交えて合計5日間行われ、私も時間が許す限り一緒に参加しました。最初に会議室で基本的なこと、カメラや三脚の使い方から始まり、カメラアングル、画角･構図などを学びました。

ご意見・お便りはこちら！ ni_oso_rep@jica.go.jp
過去の支所便りは**こちら**もしくは右の QR コードから
編集長：小畑支所長　/　編集・デザイン：山本企画調査員

ビデオカメラの持ち方から学ぶ

ビデオカメラ、三脚の使い方を学ぶ

基本操作を理解した後、実際に普及局の敷地内でそれぞれの参加者がカメラを使って撮影実習を行い、さらには会議室にて自分達で撮影した素材を使って映像編集について学びました。終始、関心をもって取り組んでいましたが、初めてビデオカメラを手にする参加者から、技術スタッフとして映像作成の実務に携わっている参加者まで、様々なメンバーが学び合いながら進めました。

普及局の敷地内での撮影実習では、最初は決められた建物や樹木、そして駐車場で待機しているドライバー達を被写体に講師の指導を受けつつ、アングルや構図などについて実際に自分で撮影しながら練習を行いました。一通り操作に慣れたところで2-3人に分かれ、各々が敷地内で気になるものを距離、構図、角度を変えて思い思いに撮影しました。終了時間になっても戻ってこないペアがいくつかあり、みんな意欲をもって楽しんでやっている様子が伝わってきました。

実際に屋外で撮影の練習

撮影練習を通じて構図等の指導を受ける

参加者同士での学び合い

待機するドライバーを被写体に撮影練習

研修後、現場活動時にビデオカメラを携えて、素材集めが始まっています。

広報用映像の構成についての話し合いも行われ、①最初にSHEP概要を説明する、②農民の成功体験インタビューを入れる、③上級職の現地視察及びコメントをもらうなど、内容が詰められ、さらに、ナレーター、インタビュアー、撮影、現地視察調整など、各C/Pの役割分担も決められました。完成にはまだ時間を要しそうですが、出来上がりましたらこちらで紹介いたします。

今夏から始まるPASVA第3期では、これまでの現場におけるSHEP活動から、SHEPの制度化へと活動の主軸を向けていきます。そして、こうした広報映像等の活用の場も増えていくことと思います。

（PASVA業務調整／研修2 森永専門家）

現場活動の撮影が進んでいます。

ニジェールでゴミを集める日本人（第35回）
～選挙で出てくるゴミとそのリサイクル～

支所便り2016年7月号から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一教授の「ニジェールでゴミを集める日本人」シリーズ第35話。今回は選挙で発生した大量のゴミの行方について寄稿いただきました。

ニジェールでは2020年12月27日に大統領選挙の第1回投票がおこなわれ、立候補できたのは30人でした。第一位の得票数のバズム候補は過半数を得ることができなかったため、第二位のマハマン・ウスマン候補との決選投票となりました。決選投票は2021年2月21日に実施され、その選挙結果によってバズム候補が勝利しました。ウスマン候補の陣営は選挙プロセスに不正があったとして、結果の受け入れを拒否していましたが、けっきょく、バズム候補が大統領に就任しました。第2回の決戦投票率の投票率は69.7%で、有権者740万人のうち520万人が投票しました。この選挙結果は、ニジェール支所便りを読んでいる方にとっては、よく知った事実なのだと思います。

2022年3月に、わたしがJICA草の根プロジェクトのカウンターパート機関である環境・砂漠化対策省を訪問したとき、カウンターパートのクリバリー氏とオフィスでひととおり話をし終えて、クリバリー氏とその部下であるガガラ氏とともにラボラトリー（実験室）の方へ案内されました。これは、いつものコースです。

環境･砂漠化対策省はアメリカ大使館の駐車場に隣接しており、アメリカやフランスの大使館ほど厳重ではないものの、ゲートには警備がついています。その敷地の奥まったところに、職員たちがラボラトリーと呼ぶ一角があります。大きさは20mx50mほどでしょうか。このラボラトリーはJICAニジェール支所が長年にわたり支援しつづけており、わたしが使わせてもらっている荷台つきのバイクが駐車されていたり、苗木が育てられていたり、あるいはコンポストを作るための溝が掘られています。

環境･砂漠化対策省のラボラトリーに山積みになっている袋

わたしはクリバリー氏とガガラ氏にラボラトリーに案内されると、山のように積み重なった段ボール箱と100kg用の穀物袋、そして日光に当たって劣化したプラスチックの箱が目に入りました。また、1000kg用の巨大な袋に何かが詰まっています。これらの山積みになった段ボールや袋に埋もれるように、男性がひとり座っていて、ひたすら紙を破りつづけています。そのA4用紙を見せてもらうと、未使用の委任状でした。投票に行けない人が第三者に投票を委任することを申請するための用紙です。もちろん、未使用ですから、名前や住所、日付け、国民登録番号などの記入はありません。

段ボールのなかには1回目の投票用紙が入っていて、カラー印刷で30人の立候補者の顔写真が掲載されています。第2回の投票用紙もあり、バズム候補とウスマン候補の写真が左右にカラーで印刷されています。投票用紙には、それぞれの顔写真の右下に2cm四方の正方形の枠があり、識字率が低いニジェールゆえでしょうか、文字で名前を認識できない人も多くいるため、候補者の顔写真と政党のマークがカラーで

投票用紙を見せてくれる生活改善局の局長、クリバリー氏（左から2番目）

荷台付きバイクに紙の詰まった袋を積み込みます。1袋の重量は50～60kgもあります。このバイクはJICAニジェール支所から援助されたもので、わたしたちは物資運搬に活用させてもらっています。

記されています。文字を読めない人からすると、候補者はすべて40代以上の男性で、イスラム帽か、ターバン、あるいは背広にネクタイの男性もいて、どれがお目当ての候補者なのかははっきり分かりません。誤記入も少なくないと言います。

インクを右手の親指につけて、この枠の中に指紋押捺をします。このインクも大量に残っていて、わたしが容器を触るとインクが漏れてきて、指につくと簡単にはとれません。このとれにくいインクの使用は重複投票を防ぐ役割があるのだそうです。また、山のなかには得票数の集計用紙なども混じっています。

クリバリー氏によると、ニアメ市で使われなかった投票用紙や集計用紙、委任状、インク、投票用紙を保管するプラスチック容器などが集められ、選挙管理委員会が処理に困っていたところ、環境･砂漠化対策省が申し出て引き取ったのだと言います。その廃棄量の多さに驚くわたしに対して、これはニアメ市内だけで、ドッソやティラベリなどそのほかの地域の分は含まれていないと言います。ガガラ氏はつづけて、ふつうであれば、この用紙は焼却されることになるが、焼却すると二酸化炭素が排出されることになるので、省内でどうにかして有効活用ができないのか検討しているというのです。

わたしのオフィスでは印刷のまちがいやコピーのしそこないが出て、それが多量の場合、ニアメ市内ではそのような裏紙を売ることができます。行商人が古紙を引き取ってくれ、かわりに商品をくれることもあります。わたしは裏紙との交換で、揚げたキャッサバをもらって、食べたこともあります。しかし、こと選挙用紙やその集計用紙となると、簡単に市中に出して再利用したり、廃棄して、ゴミ捨て場で風に吹かれるままにしたりするわけにもいきません。そのため、環境･砂漠化対策省によって試作品がつくられました。

男性がA4の紙を4分の1くらいに手で切り、それをドラム缶の水のなかに入れ、ふやかします。そして、ふやかした紙をぬれた状態で袋へ詰めていきます。これが、家畜の餌になると言うのです。ニアメ市内で放し飼いにされている家畜は、段ボールをよく食べています。その光景をみて、クリバリー氏は家畜の餌にすることを思いついたというのです。山積みとなった30袋のうち、わたしは6袋をもらい受けました。

ニアメの高級パン屋さんで購入したパンの包み紙は裏紙です。なにやら文字が印刷されています。

その翌日、わたしは牧畜民の村へ2袋を持って行き、さっそくヒツジに与えました。村で飼育されているヒツジは紙を食べ慣れないせいか、あるいは空腹ではないせいなのか、匂いをにおっただけで素通りをしていきます。あまり好みの餌というわけではないようですが、クリバリー氏は、このふやかした紙に塩をまぜると良いのだと言います。ニアメ市内では少頭数のヒツジやヤギが飼育されている家屋もあり、実験的に飼料として与えているようです。

ゴミ捨て場で、たばこの箱を食べるヤギ（ニアメ市コミューンV）。

ヒツジの群れは紙に鼻をつけて匂っただけで、
そのまま去って行きました。

複数政党制による選挙は、民主主義の根幹です。昨年の選挙ではニジェール国内で220万の投票用紙が未使用のまま捨てられ、記入済みのものをふくめると、すくなくとも740万枚の紙が廃棄されたことになります。ニジェールでは、さまざまな工夫がなされてゴミを有効活用し、それを直接、人々の生活改善に結びつけようとする取り組みが進んでいます。ロシアによるウクライナの侵攻など暗い世相がたちこめるなか、物価も高騰し、環境破壊や資源･廃棄物の問題、貧困や飢餓、暴力の蔓延も緊急の課題となっています。たばこの箱を食べるヤギをみて、環境･砂漠化対策省のさまざまな試行錯誤を応援しながら、わたし自身もさまざまな取り組みを進めていきたいと考えています。

今月の支所活動：学校清掃キャンペーンの開催（標語・寸劇コンクール）

ニジェール支所ではACCP（アフリカきれいな街プラットフォーム）の枠組みで、2017年から学校での清掃キャンペーンを行っております。

これまでは学校周辺での清掃活動や清掃道具の供与を行ってきましたが、清掃道具が長持ちせず、生徒の清掃意識が継続しにくいことが課題でした。「学校は学ぶ場だけではなく、協調活動を学ぶ場でもあるため、清掃活動を通じて学んで貰いたい」と意気込む環境省の担当者ともに、生徒の清掃意識を向上させるために何ができるか。という点で協議を重ね、ニアメ市内の中学校を巻き込み、今回の校内美化スローガン・寸劇募集が実現することになりました。

テーマは「きれいな学校を」

まずは校内予選として、各学校で1つの寸劇、1つのスローガンを選出。その後、最終選考の場である審査委員会では2時間の協議ののちに最優秀賞が決定しました。全会一致でノルディレ中学校が選出した「私の学校、私の宝石」が選出。次点で「わたしたちは環境責任者になることを約束します」「みんな集まれ! 清潔で健康的な学校環境のために」の2作品となりました。最優秀校にはスローガンが印刷されたTシャツが配布されます。

スローガンは、日本の学校に掲示されてある横断幕の標語から着想を得たものです。私も学生の頃、学校に行くたびに無意識に標語が目に入っていたのを思い出していました。ニジェールでは横断幕文化はないものの、標語やキャッチコピーを好む習慣があり、今回の選考過程ではシンプルな韻を踏んだものがより好まれることがわかりました。

最優秀賞の発表のほか、箒やごみ箱などの清掃道具と廃タイヤで作成したベンチの供与式も実施。ニジェールの多くの校庭には遊具がなく、生徒が座れるベンチすらありません。木陰に設置した廃タイヤに座

清掃道具の供与式も同時開催。小畑支所長から受け渡し

本式典の様子は国営放送にも取り上げられました

廃タイヤを用いたベンチ。両国の国旗のデザインも

ベンチの上部には制作業者のオリジナリティ溢れる絵も

スローガンの内容に即したデザインに仕上げました

り、生徒同士の憩いの場になればと思います。

いかに美化意識を継続させるか

これからスローガン3作品は対象3校で1年間掲示されます。過酷な直射日光と雨風の下、どれだけ形を保ってくれるかドキドキしています。生徒が脚本･出演した寸劇は、昨年、動画制作の能力強化を行った環境省の啓発活動チーム（上写真中央）が3-6分のショート動画に編集し、生徒間でWhatsAPPを通じて拡散を始めました。1年間でさまざまな啓発作品を産み出し、バズるコツを体得した頼もしいチームに成長しました。「生徒は自分達が映っているから、自分ごととして捉えることができる」と前述の環境省の職員はいいます。

いかに美化意識を継続させるかとう点で始まった試行的な取り組みですが、私たちはこの活動を通して生徒たちにどのような変化があるかを観察すると共に、次回は他の学校にも展開できるよう検討していきたいと思います。（企画調査員 山本 主税）

お知らせ：ニジェールのドクター・タニ 外科医 谷垣雄三物語のご紹介

ニジェールラバーの皆様は既にご存知の方も多いかと思いますが、2022年5月20日に谷垣先生の功績を伝える書籍「ニジェールのドクター･タニ 外科医 谷垣雄三物語」が丸善出版から発売になりました。本書籍では、谷垣先生のニジェールでのご活躍はもちろんのこと、1979年に初めて渡航されるまでの国内でのご活躍、谷垣先生のお人柄やご友人との関わり、青年海外協力隊とのエピソードなど様々な視点で谷垣先生を知ることができます。

拝読したのち、私も一支所スタッフとして、谷垣先生が強く抱かれていた「現地に即した技術協力」を、その想いを強く紡いでいきたいと改めて感じました。ナショナルスタッフが谷垣先生のことを話す時には、家族のように懐かしげに、そして誇らしげに語る様子が印象的で、本書籍によりその理由の一端が垣間見えた気がしました。

ニジェールと日本を語る上で、欠かすことができない、谷垣先生のご活躍を、是非お手にとってご覧ください。

（企画調査員 山本 主税）